ポーランドの地理学

山 本 茂*

Geography of Poland

Shigeru YAMAMOTO*

Abstract

Aim: The author describes the main characteristics of the study of geography sciences in Poland and its development. In Poland, the continuity of geography sciences has fairly strong foundations. To explain these foundations the author discusses the relationship between the history of geography sciences in Poland and research since the 18th century, as well as the importance of knowledge about the country's land, people, and history.

Method: Three approaches are adopted in this study. Interviews and discussions with geographers in Poland helped to enhance the author's understanding. The standard research method of collecting and reading literature was used; however, knowledge obtained through observations during the author's stay in Poland over the past 40 years was another important source of information used to complete this study.

Results: The main results can be summarized by three points.

1. Poland's geography is important from a geopolitical viewpoint.
2. The Academy of Sciences systems introduced along with socialism can be regarded as a device that supports geography sciences.
3. Five major accomplishments are identified in geography science research in Poland.
 - ① Progress of theory in economic geography from the 1950s into the 1990s: the theory and practice of economic regionalization.
 - ② Studies in urban and population geography conducted from the 1960s into the 1990s.
 - ③ Studies in the regional (spatial) structure of national economy and, as an extension, the development of socialist futurology (or geography of the future) toward the 21st century.
 - ④ Restoration of traditional regional geography in forms such as the study of ethnic minority groups in the Eurasian space. Eastern border problems in the EU, Republic of Poland, and ethnic minorities.
 - ⑤ Cartography: the national atlases published during these periods were notable achievements in the field of cartography.

Key words : Poland, geography sciences, department of geography, geopolitical location, "Academy of Sciences" systems, regional (spatial) structure of national economy, urban agglomeration

キーワード : ポーランド, 地理学, 地理学教室, 地政学的位置, 科学アカデミー・システム, 国民経済の地域構造, 大都市圏

* 埼玉大学名誉教授

* Professor Emeritus, Saitama University, Saitama, 338-8570, Japan

I. はじめに

本稿の目的はポーランドの地理学研究の特質を国際的視点、とくに日本との比較において説明することにある。

第一にいえることは、ポーランドにおいて地理学が諸科学のなかで基本的なディシプリンとして、学術研究にも社会的にもしっかりと根付いていることである。地理学はポーランド社会で二つの側面で認知されている。一つはあらゆるレベルの学校教育における独立教科として、中等教育では地理は全員が履修しており、とりわけ高等教育の社会科学系分野においては卒業要件のひとつと位置づけられている。この点で中等教育（後期）における地理履修率が半数にも満たない日本の状況とはきわめて対照的である。

二つ目に地理学研究の成果とその社会的応用・実践的役割においてである。ポーランドにおける地理（学）の立ち位置は、長い歴史と伝統のなかで構築されてきたものであって、第二次世界大戦の戦禍をくぐり、半世紀にわたる社会主義時代を経て、はたまた市場経済体制下にあっても、なお安定的であり普遍的な存在である。

本稿では、われわれの手が届く、しかも実際に多少の意味を感じられる現代、とくに第二次世界大戦後の社会主義時代および1989年以降の市場経済移行期（それぞれ時代名称には多くの可能性がある）の四半世紀におけるポーランド地理学の問題性について言及するに留める。

ポーランド社会の歴史的転換期に遭遇して地理学界が地理学研究の来し方と行く末について内在的な反省と問題点の整理に向かうのは自然のことである。近年、その営みの代表的な成果が公刊され（Jackowski *et al.*, 2008）、またこれまでにも時どきの論文として発表されてきた（Taylor, 1985; Rykiel, 1988; Chojnicki, 1996; Kortus, 2001）。

だがこの国の地理学の現状と問題性について、日本語で書かれた記述はほぼ皆無であり、執筆者がこの分野についてほとんど関心がなかったにもかかわらず素描を試みるのも多少の意味を感じるからである。とくに1970年代前半（ギエレク時

代）からこの国の地理学の環境に身を置いてきた立場から経験的な観察も含めてたどってみるが、限られた観察力で思わぬ誤りがあればご海容をいただきたい。

II. 研究教育体制、学会活動、 大学院教育・学部教育

本章では、この国の地理学界を特徴づける科学アカデミー制度について概説し、ついで学会活動、大学院教育（研究者養成）、学部教育、中等教育、それらの変化に分けて考察する。

1) 科学アカデミー制度と高等教育

1-1) 科学アカデミーの制度と組織

ポーランドにおける科学アカデミーと大学の関係について、わかりにくいところではあるが、正しく理解しておく必要がある。ポーランドと日本の地理学界において大きく相違している点は、科学アカデミーの存在と大学・大学院との関係である。

科学アカデミーの制度と組織は1950年代初頭にソ連・東欧諸国で国の最高レベルの研究機関として創設された。ポーランドを含むほぼすべての国ぐにで相次いで整備されていった。ポーランドにおいて科学アカデミー制度は1952年に導入され、ポーランド科学アカデミー地理学研究所（Instytut Geografii, Polskie Akademia Nauk, 以下IG PANと略記）は1953年にスタニスワフ・レシチツキ（S. Leszczycki, 1907-1996）を初代所長に迎えて発足した。レシチツキはクラクフ出身の地理学者で、ナチス侵略時にヤギェオ大学教授団300人の一員としてミュンヘン近郊のダッハウ収容所に連行され、その地で終戦を迎えた。戦後帰国してクラクフで大学教員に戻るが、ポーランド社会の復興とワルシャワ大学の再建のためワルシャワ大学に転じ、1948年から地理学研究所長の職に就いた。

1953年にはIG PANとワルシャワ大学地理学部（Instytut Geografii, Uniwersytet Warszawski, 以下IG UWと略記）というポーランド最大の2つの地理学研究・教育機関の長を兼務してポーランド地理学界に大きな権力をふるうことになった。その在任期間は実に30年に及んだ。ちなみ

にレシチツキはポーランド統一労働者党 (PZPR) 党員であり、その活動範囲はアカデミズムの地理学者であるに留まらず、ポーランド外務省の第一外務次官として、戦後ソ連に割譲された旧東部領から数 100 万人の住民の引揚とその定着事業の責任者として大きな貢献をした。

ポーランドの戦後権力はソ連型集権制とは異なり、たとえば大学・学部などで正副学部長 (2～4 人) のうち最低 1 人は党員でなければならないという指導と暗黙の了解のもとで大学の自治と自由は相対的に保たれていた。これは実証不可能だが、平時の安定装置としては妥当な指針であったと思われる。

レシチツキは地理学者としては経済地理学分野で活動し、国民経済の地域構造の解明、地理学方法論の探求、観光地理学の創始など戦後ポーランド地理学の創設と発展に大いに貢献した。また国際地理学連合 (IGU) の会長 (1968-1972)、副会長 (1972-1976) やその経済地理コミッション委員長などの要職を歴任している。

退官時にはワルシャワ大学で 3 人目となる「桂冠教授」(Laureate Professor) の称号を授与され、また従来の IG PAN のほうは正式名称を「スタニスワフ・レシチツキ記念地理学・空間経営研究所」(IGiPZ PAN と略記) と改め、その偉業を讃えている。

1-2) ポーランド科学アカデミー地理科学委員会

この IGiPZ PAN の存立基盤はどこに求められるか。ポーランド科学アカデミーは学問のディシプリンごとに数多くの委員会 (Commission) が組織されている。そのなかで地理学研究・教育を担当する組織は、「ポーランド科学アカデミー地理科学委員会」(Commission on Geographical Sciences) である。

この委員会がポーランド国内の地理学研究と教育全般について責任を負うことになっている。委員会のメンバーは 30～40 人で、全国の教授・准教授から秘密投票で選出され、一定期間 (3～4 年)、その任務にたずさわる。ここでは出身大学や特定グループの互選というような恣意性は機能せず、社会的公正が保たれている。50 年に及

ぶ科学アカデミー地理科学委員会の歴史のなかで、レシチツキは 14 年にわたり会長職を務め、地理学界全体の発展の推進力となっていた。

IGiPZ PAN は、この委員会に対して、国民経済にとってとくに高度な研究を遂行すること、全国の大学など他の地理学研究センターとの共同研究やその成果に対する出版助成などを通して責任を果たすことになっている。

国民の負託を負ったこの委員会が研究課題を果たすためには中長期的な人事政策が求められる。IGiPZ PAN は他のいずれの大学や研究機関よりも優れた研究スタッフ (人材)、研究施設、研究費などが与えられ、1989 年以降は、際立った特権的地位 ("*Primus inter pares*") を付与され、ポーランドで最重要な地理学研究センターとして役割を果たすよう強く求められている。

IGiPZ PAN はポーランド語による代表的学術誌として "*Przegląd Geograficzny*" (地理学評論) を季刊で刊行している。英文誌として "*Geographia Polonica*", "*Geopolitical Studies*", "*EUROPA XXI*" を刊行している。他に "*Prace Geograficzne*", "*Atlas Warszawy*" などでも上梓されている。

2) 地理学会の活動

2-1) IGiPZ PAN と PTG

ポーランド地理学界における学会活動を日本の場合と対比しながら考えてみる。ポーランドの地理学は多くのヨーロッパ諸国の例に伍して、地理学の社会的地位および国民教養の基礎的分野として高度な制度化がされていて、しっかり定着している。それは日本の地理学界とはまず対照的な立場にあるといえる。

IGiPZ PAN は地理学研究の中心的存在ではあるが、それ自体は地理学会ではない。ポーランドで地理学会といえはまず「ポーランド地理学協会」(Polskie Towarzystwo Geograficzne, PTG) で、会員数約 1,500 人 (2006)、各地に 23 支部を置いている。同会は新生ポーランド成立期の 1918 年に設立され、第二次世界大戦時を除いて年 1 回の全国大会を開催している。その参加者数は他の学会のなかで最大規模である。年次大会は各支部持ち回りで開催されている。

PTG 会員は大学教員や研究機関の専門研究者、中等教育の教員、地理愛好者、技術者などからなる。社会主義時代、学会活動の財政は国家予算で維持されていた。会員数は、2,500 人 (1956) ~ 3,418 人 (1978) と不安定で変動が激しい。市場経済移行に伴う混乱期にはわずか 1,000 人 (1995) に落ち込んだこともあった。

機関誌『地理学雑誌』(*Czasopismo Geograficzne*) はポーランド最古の地理学誌の一つで、協会の本部はワルシャワ大学地理学部の一室におかれ、IGiPZ PAN のバンスキ (J. Bański) が会長職に就いている。

そのほか協会以外にも各地の大学に関連する学会や専門分野別の研究部会のシンポジウムなどが組織されており、そのなかには世界レベルの専門学会に成長したものもある (Zioło, 2010)。

だが、日本のように全国的総合的な学会が年次大会を開催しそこに多くの学会員が参加したり、専門分野別にも全国的学会があり、そこにもかなりの学会員が参集したり、同時に地域的ブロック的の学会もあって、かなりの学会員が参加する研究大会が開催されるというある種の“賑わい”というものはない。むしろ、各学協会や IGiPZ PAN のような研究センターで頻繁に開催される研究集会や分野ごとのセミナーなどが実質的な研究発表と交流の場となっている。

一般的には各種研究集会を渡り歩くことも多くないし、研究集会が時期的に集中することもないようだ。

『地理学雑誌』と並んで、ポーランド地理学界でもっとも権威の高い研究誌に『地理学評論』(*Przegląd Geograficzny*) がある。後者はポーランド地理学協会が設立された 1918 年以来、同協会の公式出版物であったが、第二次世界大戦後に IG PAN が創設されると、その機関誌となり現在に至っている。

かわって、ポーランド地理学協会はそれまでポーランド地理教員連盟 (*Zrzeszenie Polskich Nauczycieli Geografii*) の機関誌であった出版物を PTG の機関誌『地理学雑誌』(*Czasopismo Geograficzne*) として継承することになった。

2-2) ポーランド地理学界とヨーロッパ

ポーランド地理学界のヨーロッパ諸国との交流は 19 世紀末にさかのぼるが、国際地理学連合第 7 回大会 (ベルリン) の参加者名簿にはポーランド地理学者の名前が記帳されている。またポーランドが独立を回復した 1918 年には国土への地理的関心の高まりのなかでワルシャワおよびクラクワの大学教授らによって研究成果が結実し、1922 年の第 8 回大会 (ブリュッセル) では新生ポーランドから E. ロメル (ルヴフ, 1871-1954) の主唱で一連の報告書が提出された。1928 年にはロメルは東中欧で最初の IGU 副会長のポストに就いた。

第二次世界大戦の帰結として、ヨーロッパは東西に分裂し、ポーランドは社会主義国となった。第二次世界大戦後、ポーランド地理学界が IGC に代表団を送ったのは第 18 回大会 (リオデジャネイロ) であった。ポーランドはそれ以降毎回 IGC に代表団を派遣して地理学研究の発展に貢献してきた。

この 60 年の期間に、ポーランドの地理学者が IGU 会長に就いたのは、スタニスワフ・レシツキ (1968-1972)、副会長には同氏が 2 期 (1964-1968, 1972-1976) 務めたほか、J. コストロヴィツキ (2 期) である。

しかしながら、1989 年以降、ポーランド地理学界は市場経済への移行という社会経済体制の変貌のなかで激動期をむかえ、新たな社会的役割を果たすべく、大学 (学部・学科) の名称変更、研究組織の再編成、入学定員の増加、新組織の創設など目まぐるしい変貌を遂げつつある。

IG PAN や現在の IGiPZ PAN も社会主義時代も含めてつねにその時々課題にこたえるべく、研究組織の再編成を続けてきた。そのため研究所内外には研究組織の再編成は創立以来やっていない時期はなかったと自嘲気味に指摘する研究者もいる。

3) 大学院・学部教育の問題—大学における地理学研究・教育—

3-1) 大学の地理学科

2011 年現在、IGiPZ PAN と 11 大学および教育系・経済系アカデミーなどで地理学の研究と教

育がおこなわれている。地理学科は組織的には生物・地球科学学部などの学部のなかに置かれていることが多い。独立した地理学部があるのはワルシャワとウッチの2大学だけである。地理学研究の成果に対して「博士」(Doktor) および「上級博士」(Doktor habilitacja) の学位を授与できるのは8大学と IGiPZ PAN だけとなっている。

ポーランド全体では約1,200人の地理学者が研究・教育職に就いている。うち教授・准教授は約200人と推定されている (Czyz, 2002)。

ポーランドにおける地理学研究は、なによりもポーランド科学アカデミーに責任を負う上記の IGiPZ PAN, ならびにポーランド地理学協会の手組みのなかで大学 (Uniwersytet) および同レベルの専科大学 (Akademia), たとえばワルシャワ経済大学, クラクフ教育大学, ポズナン経済大学などで進められている。

ポーランドの大学は5年制が一般的で, 卒業すると「修士」(MSc) の資格を取得できる。また, ポーランドではヨーロッパの伝統に従って, 1都市には1つの大学が存在し, 他の高等教育機関はアカデミアなどと称していた。ところが近年の大学改革のなかで, 教育や経済の専科大学が「大学」に昇格し, たとえばクラクフでは現在3つの大学 (ヤギェウォ大学, クラクフ経済大学, クラクフ教育大学) で地理学が研究・教育されている。

全国各地の大学などで地理学の研究と教育が行われているが, 研究活動の面では, 首都ワルシャワと南部の中心都市クラクフが中心地である。前者ではワルシャワ大学を中心にワルシャワ経済大学, ワルシャワ工科大学でも地理学が講じられている。

2つの研究中心地についてポズナン (Adam Mickiewicz Univ.), ウッチ大学が続き, 以下, シロンスク大学 (Sosnowiec), ヴロツワフ大学, ルブリン大学 (Marie Skłodowska-Curie Univ.), シュチェチン大学, グダンスク大学, トルン大学 (Nicolaus Copernicus Univ.), ビドゴシュチ大学 (Kazimierz Wielki Univ.) が各地の地理学研究・教育のセンターとなっている。これらの大学

における地理学科は規模・分野・歴史・施設などで一様ではなくさまざまな特徴を擁している。

ここでは, 大学における地理学研究を代表するワルシャワ大学とヤギェウォ大学 (クラクフ) の地理学科について紹介してみる。

3-2) ワルシャワ大学 (2011 年現在)

ワルシャワ大学は1818年創設でポーランドでは古い大学であり, またポーランドを代表する大規模な総合大学である。ただポーランドの大学生の出身地の地域構成は, 多くの研究例によって明らかにされていることであるが, ワルシャワ大学といえども必ずしも全国各地から集まる学生で構成されているわけではなく, 首都ワルシャワのあるマゾヴェツキ県を中心に北のヴァルミエ・マズール県, 北東のポドラシェ県の範囲から進学することが多い。地方中心都市の大学が核となってその都市圏をこえて他の都市圏に学生が進学することは多くはない。

ワルシャワ大学は都市の起源となった旧市街 (Stare Miasto) から南に続く「王の道」と称する大通り (ul. Krakowskie Przedmieście) に沿った段丘面に本拠地を構えてきた。しかし大学の規模拡大とともに本キャンパスが手狭になっていた。近年, 本キャンパスのある平地を下ったヴィスワ左岸低地に新用地を確保し, 中央図書館を核とした新キャンパスで教育組織の再編成と再配置を進めている。

地理学科に相当する「地理学・地域研究学部」(Widział Geografii i Studiów Regionalnych UW) は, 大学正門に隣接した古い4階建ての建物 (ウルスキ宮) を占拠していた。この由緒ある建物には, 社会主義時代を通して半世紀にわたって IG UW と IG PAN が共存していた。市場経済体制への移行後に, IGiPZ PAN がようやく都心の中央地区内に中層ビルを取得して転出したため, ワルシャワ大学地理学部の教育・研究環境がおおいに改善された。

ワルシャワ大学地理学部が改組された地理学・地域研究学部は, 教授 (Profes) 14人, 准教授 (Dr. hab) 16人, 計30人, 研究員 (Dr) 8人, 非常勤講師16人を含めて60人以上の研究スタッフ

を擁し、間接部門も含めると総員 100 人規模となり、これは全国大学のなかで最大の組織となっている。かつては行政部門や補助部門が実に充実していたが、市場経済体制下で大学改革の名で合理化が強行され、学習環境の改善は進んでいない。

地理学・地域研究を専攻する 1,300 人の学生および大学院生 (Doktorant) が学んでいる。地理学・地域研究学部の構成は、ジオエコロジー (生態学)、堆積学、水文地理学の自然系にくわえて、社会経済・空間経営の地理学、地域・グローバル研究の 5 講座、および地図学と GIS 部門をもっている。また別のキャンパスに発展途上国の学際研究施設 (アフリカ研究、アジア・太平洋研究) を運営している。

3-3) ヤギェウォ大学(クラクフ)(2010 年現在)

ヤギェウォ大学は 14 世紀中葉 (1364 年) にカジミェシ三世によって創建されたポーランド最古の大学であり、中欧でもカレル大学 (プラハ) について 2 番目に古い大学である。またクラクフは 17 世紀初頭にワルシャワに遷都するまで長くポーランド王国の首都であったため、長くガリツィア地方の文化と科学の中心地の役割を果たしてきた。

ヤギェウォ大学地理学・空間経営学科 (Instytut Geografii i Gospodarki Przestrzennej Uniwersytetu Jagiellońskiego, IGiGP UJ) は生物・地球科学部に属する。クラクフは 130 年の歴史をもつポーランド最古の地理学の研究と教育の中心地である。クラクフの市街地はワルシャワや多くの都市とは異なって、第二次世界大戦で深刻な戦禍を免れたため、それまで地理学研究所は市街地に蛸足状態だったのを、ヴァヴェル城下のヴィスワ左岸の王家の武器庫跡に本拠を移し、半世紀にわたって地理学研究と教育の中心地として全国に覇をとどろかせてきた。しかし由緒あるこの建物は重要な歴史的建造物であるが、老朽化と狭小さで学習環境が悪化していた。

近年になって、クラクフ市南部の広大な植物園のなかに新キャンパスと建物群を開発し、教育研究環境を著しく改善してきた。現在は地理学・空

間経営研究所との名称のもとで 9 つの大講座を擁する組織に成長している。

自然地理学、地形学、土壤地理学、水文学、カルパティア山地の気候学、人口・集落・農業地理学、ツーリズム・リゾート経営の地理学、地域発展の地理学、それに GIS・リモートセンシングである。従来からの地理学研究の伝統的分野に加えて、とくに巡礼の地理学研究が発展しており、宗教地理学研究の中心地が形成されつつある。雑誌 “*Pielgrinus Cracoviensis*” はこの分野の発展に貢献している。

研究所の陣容は、研究スタッフ全体で 90 人の大所帯で、職階上の内訳は、教授 10 人、准教授 (Dr hab) 9 人、上級研究員 (Dr) 35 人、研究員 36 人である。大学院生 (Doktorant) は現在 117 人が在籍している。全国的にみて紛れもなく盛況である。

ポーランドでは大学院生という階層グループは認定しにくい事情がある。大学の課程はふつう 5 年間で、修了すれば「Magister」マギステル (修士, Msc) の称号を得られる。引き続き大学で研鑽に励み研究者養成コースに入学するためには博士課程の院生になるが、かれらをポーランド (やロシア) では社会主義時代から「博士候補」(Doktorant, ドクトラント) と称している。そこでは一斉授業や演習などの授業はない。指導教員のチームの末端として他の研究員とともにチームの研究課題に向けて研究補助の仕事を分担する。なかには有給の任期制助手として講座の雑務一般を担当するが、院生の全員がやるわけではない。

3-4) その他の大学

ポーランド中西部の大都市ポズナンにはアダム・ミツキエヴィチ名称総合大学とポズナン経済大学に地理学科がある。ホイニツキ (Z. Chojnicki), チシュ (T. Czyz), ドマンスキ (R. Domański) らはポーランド地理学を代表する高名な教授たちで、経済地理学の理論的探求や広く基礎概念の探求の分野で業績が高く評価されている (Chojnicki, 1979)。

全国大学の地理学教室のスタッフ数は無論日本に比して多いし、ワルシャワやクラクフの大学に

表 1 ポーランド主要大学の地理学教室の教員数 (2006).
Table 1 Number of teaching staff in universities having a department of geography in Poland (2006).

大学名 (都市名)	教授	准教授	講師・研究員・助手
ポーランド科学アカデミー地理学・空間経営研究所 (ワルシャワ)	8	13	29
カジミェシ大王大学 (ビドゴシュチ)	3	5	8
グダンスク大学 (グダンスク)	2	6	
ヤギェオ大学 (クラクフ)	13	5	37
マリエ・スクウォドフスカークリエ大学 (ルブリン)	8	10	56
ウッチ大学 (ウッチ)	5	11	43
アダム・ミツキエヴィチ大学 (ボズナン)	6	1	29
シロンスク大学 (ソスノヴィエツ)	6	12	53
ニコラス・コペルニクス大学 (トルン)	10	7	36
ワルシャワ大学 (ワルシャワ)	13	19	67
ヴロツワフ大学 (ヴロツワフ)	4	9	40

ここでは「地理学教室」を、学部 (Widzial, Fakultet), 研究所 (Instytut), 学科 (Department) などの総称として用いることにする。

資料: "Informator Nauki Polskiej 2006", Tom 2a, Instytucje Naukowe, Ośrodek Przetwarzania Informacji, Ministerstwo Nauki i Szkolnictwa Wzszego, 2220p.

遜色のない人員を擁している (表 1)。これは全国大学の地理学教室がとくに学部生の教育活動に傾斜していて、地域の実態を反映した広い範囲の研究に依拠した地理学教育が重視されているからであり、その成果は各大学で出版されている研究報告書に反映されている。

強調しておきたいことは、地理学研究の側面です。大学間地域間の格差は目立つが、地理学教育の面では大学間の差異は小さく、それぞれの個性を前面にだした教育で地域のニーズに応じた人材を供給している。

これまでポーランドで大学といえば、それはストレートに国立大学を意味していた。社会主義時代、唯一の私立大学はルブリンにあるカトリック大学で、学生数はわずかであった。市場経済体制の確立とともに、ポーランドにも国立ではない高等教育を担う大学が多数出現している。その数は確実に増加中である。

そのなかでただ一つ地理学部・学科を設置したのは「ビドゴシュチ経済高等学院」である。その教育課程をみた。学部の名称は「ツーリズムと地理学」で、2 講座からなる。一つは「地理学と空間経営」、他は「ツーリズム・ホテル学・美食学 (ガストロノミー)」とある。教員数も 28 人と充

実している。教員リストにはボズナンの高名な大教授 (故人) が載っていた。退職後の再就職口のような。もっとも、ポーランドでは専任教員と非常勤教員との差は小さく兼任禁止などの制約も少ないから、講義などの義務さえこなせばほぼ専任教員に近い収入が保証される。こうして、かなりの教員が複数の大学などに登録されている。

そうした新生の大学・学部・学科の名称や教育内容には、これまでの伝統的な大学とは異なった名称や講義名が付されていることが多い。なかにはおよそ学問体系などとの関連性が想像できないほど乖離している新設大学も少なくない。専門学校で習得する単なる技能の習得を専らとする教育機関に大学という名称が冠せられているのはいまや洋の東西を問わず共通している。地理学もここまで「現代化」すれば危機を克服できるというのであろうか。

4) 中等教育における地理教育の問題

1989 年、ポーランドは長く続いてきた初等中等教育を、八・四制から六・三・三制に変更した。第二次世界大戦後のポーランドで「地理」は「歴史」とともに終始独立した教科として存在していたし現在も存在し続けている。その意味で体制転換との関連性はほとんどない。社会主義時代

もその以前もその以後も、地理は一貫して独立教科である。

その背景にはヨーロッパにおけるポーランドの地政学的位置の重要性、および国土・国家・国民・近隣国家との関係について学ぶ「地理」の重要性について国民的に共通理解が存在していることがある。ポーランドにおいて地理と地理学が強い基盤をもっていると指摘したことの証左でもある。

その理由として次の3点が指摘できる。①上述の通り科学としての地理学の地位が高いこと。②アメリカ型の社会科（Social Studies）の伝統と影響力が弱いこと。生活視点の市民教育は地理や歴史とは別の教科となっている。社会主義時代自体がこの伝統を維持する防護壁の役割を果たしていた。これらの事情は近隣する東中欧諸国にも通じる点が多い。

教科書検定は教育省内に設置される教科書委員会が当たる。委員会はおもに地理学者が中心的役割を果たし、教育省担当者は領土・歴史問題の記述に関心をもつが、その他の内容は委員会の自由裁量となっている。③注目すべきは、日本の学習指導要領（とその解説書）などの一律化装置が存在せず、教育行政は理念・原則・基準を提示するにとどめていることである。社会主義時代にも教科書編集においてイデオロギッシュな強圧指導は少なく、研究者主導の自由な教科書編集が進められていた。逆に日本の地理教育にみるように、学習指導要領体制下で一言一句の解釈権の独占をてこにした指導で関係者を右往左往させることはない。

ポーランドの中等教育における地理は、「地理教育」ではなく「地理学教育」である。ここで言う地理教育とは児童生徒の地理的認識を成長発展させるための教育で、視点を学習者にあてて組み上げていく学習体系であるのに対して、地理学教育は地理学研究の到達点に立って、その成果を教育的に組みほぐしていく学習体系である。両者は相対立する逆方向ベクトルであって、目的も方法も相容れない関係にある。ポーランドでは前期中等教育から高等教育まで地理学研究成果や到達

点が整理され一貫性のある内容となっている。

教科書にはそれが見事に反映されている。前期中等教育地理の最新の教科書は文献の通りであるが、そこには地理の基本内容が客観的に整然と整理されている（Malarz, 2009）。また3分冊の教科書それぞれにDVD教材が付属していて、教科書の補足説明や演習課題などが付加されている。

III. 学術的に特色がある研究分野、世界的な地理学者、日本との研究交流

1) 特色ある分野、学術的に価値が高い研究

ポーランドの人文地理学研究における特色ある分野および学術的に価値が高いと思われる研究分野として、つぎの5つの分野に集約することができる。

第一の分野は、経済地理学の基礎理論の探求・構築に関わる分野である。1950年代後半から1970年ころにかけて、ポーランド地理学の主唱によってIGU内にコミッションが組織され、そこでの研究成果が国際的に高く評価されている。この潮流は広くはソ連におけるモスクワ大学・レニングラード大学（当時）を拠点とした経済地理学の基礎理論の探求と創造に触発されたもので、国土の社会主義的発展と関連させていた。モスクワ大学のヴェ・ア・アヌーチン「地理学の諸問題」（1960）が代表的な業績である。

東中欧ではポーランドとともにチェコスロヴァキアとハンガリーでも科学アカデミーを拠点に多くの報告書が公開されている（Leszczycki, 1961; Dziewoński, 1962; Macka, 1967）。おもに経済地域区分に関連する理論探求の分野である。この研究は第二次世界大戦後の比較的早い時期に始期をたどることができ、1950年代後半から1970年代にかけておもにIG PANを中心に推進された。経済地域概念、経済地域区分論、国土の空間構造の解明などが活発に議論された（Fleszar and Leszczycki, 1970）。

この流れはまぎれもなくポーランド国土における社会主義建設の諸課題と連動する実践的な課題として経済地理学分野からの貢献が意識されていたことであり、それゆえに国家的レベルでバック

アップされていた。

当時のポーランド地理学界で大きな影響力を発揮していたレシチツキを中心に、若手の故ヴルーベル (A. Wróbel), ポズナンのホイニツキ (Z. Chojnicki) などが IGU の大会やコミッションで活躍した。日本からは故鴨澤 巖が参加している。

経済地理学の理論探求の試みは当時の地理学界でもそれと並行して進展していたが、ともに実際の経済建設と結合しており、あくまでもアカデミズム内での論争に終始した。けだし卑俗な実用主義に埋没することなく、真摯に探求されていたことが、市場経済時代に移行した後も地理学の権威を維持させる要因につながった。とくにポーランドの場合は戦後 50 年間に三度の地方行政制度の再編成を経験しているが、その過程でこうした研究成果がとり込まれている。

第二に、都市・人口地理学の分野における研究成果である。ポーランドの都市地理研究は早い時期から欧米の都市地理学の発展に刺激を受けつつも独自の研究発展の足跡を示してきた。とくにレシチツキらと同世代の故ジェヴォンスキ (K. Dziewoński) を核として、その後継者で長く地理学研究所の所長を務めたコルツェリ (P. Korcelli), さらにヴェンツワヴォヴィチ (G. Węclawowicz) へと続き、IGiPZ PAN の人文地理学の主流として今なお研究者育成の中心の役割を果たしている。コルツェリらはミネソタ大学でアメリカの都市研究者との交流を通して大都市圏の発展モデルを進化させてきた (Korcelli *et al.*, 2008)。

ヴェンツワヴォヴィチらの首都ワルシャワの都市地理研究は、ワルシャワ大都市圏研究に優れた業績をあげてきたし、実証精神にあふれた実態調査で社会的に注目されている。その成果は不定期刊のシリーズ “*Atlas Warszawa*” に続々と発表され、活気のある研究チームが内外からの人材を引き付ける原動力となっている (Węclawowicz *et al.*, 2006)。

三つ目には、国民経済の空間構造研究から派生した潮流とも位置づけられるが、社会主義時代の国土の計画的発展と結びついて、1980 年代以降

に社会主義型未来学 (Socialist Futurology) ともいえるべき研究成果が開花した。

その中心にあったのはククリンスキ (A. Kukliński, ワルシャワ大学, 当時) の研究グループである。かれらはオランダ, イタリア, フランスなどの地域科学研究者の協力を得て「国連社会発展研究所」(United Nations Research Institute for Social Development, UNRISD) のプロジェクト研究を組織し、その成果は Kukliński (1972) を含む一連の叢書に結実している。その過程で極形成論 (Growth Pole Theory) や地域科学の発展に貢献している。

さらに市場経済への移行, ポーランドの EU 加盟が日程に上るとともに, EU 空間のインフラ整備と随伴して, ロンドン・パリ・モスクワを結ぶヨーロッパ新空間の構築を提唱するなど新たな展開をみせている (Kukliński, 2003)。

第四に, IGiPZ PAN におけるヨーロッパ地理学の伝統を継承する地域地理学の潮流である。これはワルシャワ大学地理学・地域研究学部とも共通する面が多いが, 社会主義時代には国民の政治教育とも連携しながらアカデミー以外の教育機関 (ポーランド統一労働者党大学校) などでバルバク (B. Barbag), ヴィニド (B. Winid) (ともにワルシャワ大学) らを中心に活発に論陣を張った。

IGiPZ PAN ではこの流れは 1960 年代にはククリンスキ, 70 年代にはマリシュ (B. Marisz) が主宰したが, 後に発展途上国研究の成果も統合して故ロシチシェフスキ (M.M. Rosciszewski) の「発展の地理学」(Geography of Development) に受け継がれ, その後は, エベルハルト (P. Eberhardt, 1935-2005), さらに 2006 年以降は若手のコモルニツキ (P. Komornicki) に受け継がれている。前者の業績の集大成というべき『20 世紀の中東欧における民族と人口の変化』(Eberhardt, 2001) はいまなお圧巻である。

コモルニツキらは EU 加盟後のポーランドにおける東部国境問題に注目し, 実態調査を重ねている (Kitowski, 2003, 2010; Komornicki, 2010)。その延長で東中欧諸国の地理学者を招いて “Warsaw Regional Forum” (2004 年第 1 回開催, 隔年

開催)を開催している (Degórski, 2006)

英語による学術誌 “*Geopolitical Studies*” は IGiPZ PAN の代表的な刊行物であるが、その成果はこの潮流の活動によっており、同時に地域地理学研究の現代化という側面をもっていることにも注目したい。

第五には、ポーランドの地図製作の分野での業績である。中欧諸国には多かれ少なかれ地図製作の伝統が強いが、ポーランドもそうした国の一つである。新生ポーランド時には軍事と結んだ測地・地図製作が実施されてはいるが、大学などのアカデミズムでも地図製作部門は地理学研究と密接に連携して、重要な柱となっている。

社会主義時代、ナショナル・アトラスは、IG UW と IG PAN が共同で製作していたが、現在は施設と技術陣とともども IGiPZ PAN の業務となっている。これまでに二度、ポーランドのナショナル・アトラスの作成と刊行の過程を垣間みた。最初は「国際地図年」に標準をあわせて出版された “*Narodowy Atlas Polski*” (ポーランド国家アトラス, 1973, 185p.) であり、近くは “*Atlas Rzeczypospolitej Polskiej*” (ポーランド共和国アトラス, 1993, IGiPZ PAN), であった。何度かの滞在中に “*Atlas Przemysłu Polski*” (ポーランド工業アトラス, 1975, Red.: Stanisław Leszczycki, IG PAN, 85 sheets) の存在を知った。

地図は一面では軍事と関連が深い。社会主義時代には地形図 (5 万分の 1) は入手ができなかった。また閲覧は不可能ではないが、閲覧許可を得るためには実に煩雑な手続きが不可欠だった。また私蔵の『ポーランド工業アトラス』(1975 年)には丸秘 (“*Poufny*”) の印が押され、配布番号が書き添えられている。1990 年代になってようやく主著者の M 教授から開示され贈呈された一本である。

2) ポーランドとの研究交流

日本とポーランドとの研究交流について触れる。1960 年代初期、日本が IGC に参加するようになって、国際会議などでポーランド地理学者とコンタクトが生まれ、研究交流がはじまった。当時、IGC に出席された世代は多田文雄、木内信蔵、

青野壽郎らであろう。その後、IGU 傘下のコミッションや招待交流などで、関口 武、鴨澤 巖、吉野正敏、中村泰三、山口岳志、大矢雅彦などがポーランドを訪問し研究交流の機会をもった。1980 年 IGC 東京大会の開催でポーランドから地理学者が多数訪日し、多角的飛躍的に交流機会が増大した。しかし若い研究者・院生などの留学デスティネーションとしてポーランドが選択されることはなかった。おそらく野原敏雄や山本 茂らが最初ではないか。

東欧革命後、東欧諸国の調査環境の変化のなかで小林浩二を中心に研究グループが組織され、数年間にわたって東中欧を対象地域としたエクステンシヴ調査が行われ、多くの出版物や報告書が公開されている (例えば、小林ほか, 2000)。

これまでの日ポ間の交流は個人単位であったが、組織的な研究交流の嚆矢は、「日本ポーランド地理学セミナー」で過去 4 回実施されている。このセミナーは小規模なバイラテラルな交流であるが、1987 年以来数年おきに 4 回 (ポーランドで 2 回、日本で 2 回 (都留市、名古屋市)) 開催されている。その後も長くポーランド科学アカデミーから開催の督促を受けていたが、資金と組織者の不足で中断してしまった。

IV. 将来展望

著者は冒頭でポーランドの地理学と地理教育は安定的であり基盤はしっかりしている、それは日本の状況とは対照的であると述べた。しかし、ポーランドの地理学や地理教育が近 20 年にわたって、激動にさらされ続けていることも事実である。東欧革命直後、とくに科学アカデミー制度は社会主義時代の遺物とみなされ、若くて有能な多くの研究者が他国の大学にポストを得たり転職・転業していった。最大の危機はこの時期であった。

その後の地理学界は市場経済体制下で国民の負託に応える研究のあり方とはどうあるべきかについて真摯な検討を深め、次第にかつてのような自信をとり戻しつつあるように思われる。問題は大学教育の側にあつて、大学進学率の上昇とともに

教育内容を刷新し調整していくという、いわば日本の現実とはほぼ同一の問題に直面している。地理学研究の課題は、若い優秀な人材の確保であり、新たな研究資源の創造、さらには国家政策へのコミットの強化の三点であろう。

謝 辞

本稿を作成するにあたって、資料と討論の機会を提供された3人の地理学者、Prof. dr hab. Zbigniew Taylor, Prof. dr hab. Grzegorz Węclawowicz (ともにIGiPZ PAN)、村山祐司(筑波大学)の諸兄に深甚な謝意を表すものである。本稿を草するため、故鴨澤 巖教授遺贈資料のうち3点の文献を利用させていただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。

文 献

- Chojnicki, Z. (1979): The methodological bases of prediction in Economic geography. *Quaestiones Geographicae*, **5**, 23-34.
- Chojnicki, Z. ed. (1996): *Contemporary Problems of Polish Geography*. Bogucki Scientific Publishers.
- Czyz, T. (2002): Rozwój kadry naukowo-dydaktycznej geografów i powiązania ośrodków akademickich w procesie jej kształcenia w Polsce w latach 1990-2000. *Przegląd Geograficzny*, **74**(1), 3-27.
- Degórski, M. ed. (2006): *Natural and Human Environment of Poland: A Geographical Overview*. IGiPZ PAN.
- Dziewoński, K. ed. (1962): "Economic Regionalization", *Materials of the First General Meeting of the Commission Held in Utrecht, the Netherlands, Sept. 1961*. IG PAN, "Dokumentacja Geograficzna", Zeszyt 1.
- Eberhardt, P. (2001): *Ethnic Groups and Population Changes in Twentieth-Century Central-Eastern Europe*. Sharpe.
- Fleszar, M. and Leszczycki, S. (1970): *Spatial Structure of Poland's Economy*. IGKR.
- Jackowski, A., Liszewski, S. and Richling, A. eds. (2008): *Historia Geografii Polskiej*. PWN.
- Kitowski, J. ed. (2003): *Eastern Dimension of European Union*. IGiPZ PAN. (*Geopolitical Studies*, 11).
- Kitowski, J. ed. (2010): *20 Years of Socio-economic Transformations in Countries of Central and Eastern Europe: An Attempt of Accounts*. IGiPZ PAN. (*Geopolitical Studies*, 16).
- 小林浩二・佐々木 博・森 和紀・加賀美雅弘・山本 充・中川聡史・呉羽正昭共編 (2000): 東欧革命後の

中央ヨーロッパ—旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの挑戦—。二宮書店。[Kobayashi, K., Sasaki, H., Mori, K., Kagami, M., Yamamoto, M., Nakagawa, S. and Kureha, M. eds. (2000): *Central Europe after the East European Revolution: Challenges in the Former East Germany, Poland, Czechia, Slovakia and Hungary* (Too *Kakumeigo No Chuo Yoroppa*). Ninomiya Publisher. (in Japanese with English title) *]

- Komornicki, T. (2010): Flows of persons and goods across the Polish segment of the outer boundary of the European Union: Results of a research project. *EURO XXI*, **20**, 9-29.
- Korcelli, P., Korcelli-Olejniczak, E. and Kozubek, E. (2008): Typologies of European urban-rural regions: A review and assessment. *Geographia Polonica*, **81**(2), 25-42.
- Kortus, B. (2001): Z historii rozwoju instytucjonalnego geografii polskiej. *Czasopismo Geograficzne*, **72**(3/4), 245-258.
- Kukliński, A. ed. (1972): *Growth Poles and Growth Centres in Regional Planning*. Mouton.
- Kukliński, A. (2003): Towards a new European space: The trajectory London-Paris-Moscow, a memorandum. *EUROPA XXI*, **8**, 5-14.
- Leszczycki, S. ed. (1961): "Problems of Economic Region", *Paper of the Economic Regionalization in Kazimierz (Poland), May, 1959*. IG PAN. (*Geographical Studies*, No. 27).
- Macka, M. ed. (1967): "Economic Regionalization", *Proceedings of the 4th General Meeting of the Commission on Methods of Economic Regionalization of the IGU, 1965 in Brno (Czechoslovakia)*.
- Malarz, R. ed. (2009): *Puls Ziemi, Podręcznik do geografii dla klasy pierwszej gimnazjum, Tom 1-3*. Nowa Era.
- Rykiel, Z. (1988): The functioning and the development of Polish human geography. *Progress in Human Geography*, **12**, 391-408.
- Taylor, Z. (1985): Geography as an academic discipline. *Journal of Geography in Higher Education*, **9**, 9.
- Węclawowicz, G., Bański, J., Degórski, M., Komornicki, T., Korcelli, P. and Sleszynski, P. (2006): *Przestrzenie Zagospodarowanie Polski Na Początku XXI Wieku*. IGiPZ PAN. (*Monografie*, 6).
- Ziolo, Z. ed. (2010): *Procesy transformacji przemysłu i usług w regionalnych i krajowych układach przestrzennych*. Wydawnictwo Naukowe UP Kraków. (*Prace Komisji Geografii Przemysłu PTG*, Nr. 15).

* Title etc. translated by S.Y.

(2012年2月29日受付, 2012年6月13日受理)